

災害ボランティア活動を通して実践し、研究する



研究室紹介

渥美公秀*

Practices and Research through Disaster Volunteers

Key Words : Group Dynamics, Disaster Volunteer

1. はじめに

我々の研究室では、グループ・ダイナミクス（集団力学・社会動学）を背景に、災害ボランティア活動を通して、ボランティアや地域づくりに関する理論的かつ実践的な研究を展開しております。災害は、人々のいのちを奪い、暮らしに大きな影響をもたらします。また、災害によって、社会に新たな問題が生じたり、災害前から潜在していた様々な問題が露わになったりします。災害ボランティアは、救急救命から復旧、復興、防災に至るまで、地域に生きる人々と一緒に、くらしや社会の改善に向けて活動します。そこでまず、災害ボランティア活動に参加しながら、活動の詳細を把握し、そこから見えてくる地域のくらしのダイナミクスを明らかにしていきます。次に、災害を通して露わになった地域の諸問題に対し、その改善を目指したアクションリサーチを展開していきます。それらをエスノグラフィーとして著し、災害ボランティア活動や地域のくらしの改善に向けて役立ててもらえるように努めます。

2. 協働的实践とアクションリサーチ

研究の大前提となるのは、現場に赴き、現地の人々と一緒になって活動していくことです。この段階を「協働的实践」と呼んでいます。協働的实践では、現場での活動が研究に結びつくかどうかは“未定”、

いや、むしろ研究とは“積極的に無関係”であることが重要だと考えています。災害現場に現れた研究室のメンバーは、測定器具を取り出すのでもなく、アンケートを配るのでもなく、ましてやICレコーダーをもってインタビューなどするわけではありません。まずは、一緒に片付けたり、炊き出しの準備をしたり、子どもと遊んだり、中には、ただただ傍にいて話を聴かせて頂くという場合もあります。研究計画もなく、研究になるかどうかとは無関係とはどういうことかと疑問に思われる読者もおられると思います。ただ、この協働的实践をどこまで深く展開しているかが、その後の研究（者）の質を左右します。

ある程度、協働的实践が進んでくると、自ずから、地域で改善したいと思われている事柄が浮かび上がってきます。研究室のメンバーが研究を意識するのはこの時です。地域社会とそこに生きる人々のくらしのベターメントを目指して、研究室と現場を往復するアクションリサーチが始まります。アクションリサーチでは、定量的な方法（例えば、アンケート調査）も定性的な方法（例えば、インタビュー調査）も用います。研究室では、理論的な文献を読んで、実践的に議論します。例えば、災害ボランティアについては、参加動機、組織化、現代社会という文脈における意義や可能性などを議論します。地域については、地域の歴史・民俗・文化や集合的記憶・協働想起などを議論します。一方、現場では、実践的な課題について、できるだけ理論的に考えて行こうとします。研究室と現場、理論と実践が融合し、現場が少しでも改善され、理論的な閃きが1つでも得られればと願いながら、研究室では日々ディスカッションを繰り返しています。



* Tomohide ATSUMI

1961年8月生

ミシガン大学大学院（心理学）（1993年）

現在、大阪大学大学院 人間科学研究科

教授 Ph.D. グループ・ダイナミクス

TEL : 06-6879-8070

FAX : 06-6879-8070

E-mail : atsumi@hus.osaka-u.ac.jp

3. 災害NPOとの連携

現場での活動については、(特)日本災害救援ボランティアネットワーク(西宮市)と連携しながら進めます。この団体は、1995年の阪神・淡路大震災を機に設立され、災害救援、復興支援、地域防災に取り組んでいます。現時点では、岩手県野田村(2011年東日本大震災の被災地)、兵庫県佐用町(2009年水害の被災地)、新潟県刈羽村(2007年中越沖地震の被災地)、新潟県小千谷市塩谷集落(2004年中越地震の被災地)などで復興支援活動を展開していますので、研究室の学生もそのプログラムに参加しながら現場での実践や研究を進めています。また、兵庫県西宮市(1995年阪神・淡路大震災の被災地)では、地域防災活動を展開しており、毎年1月17日には、全国各地の被災地から人々を招いて交流していますので、研究室のメンバーは、これらに関わりながら、防災についても学んでいます。また、小千谷市塩谷集落では、集落内に田んぼをお借りし、田植えから稲刈りまでの体験を通して、集落の復興、むらづくり、過疎問題、近代化の諸問題などを検討しています。

4. 研究の背景と成果

私自身は、大阪大学人間科学部、同大学院、および、米国ミシガン大学でグループ・ダイナミックス(社会心理学)を専攻しました。学位取得までは、実験室実験および現場実験によって人間行動の社会的要因を厳密に検討する訓練を受けてきました。しかし、1993年秋に神戸大学に職を得て西宮市に住み始めたところ、まもなく、阪神・淡路大震災に遭いました。駆け出しの教員だった私は、研究になるなどとは一切思わず(思えず)、ただただ何かやらなければならないという思いだけは強く、ボランティアとして現場で救援活動に没頭しました。すると、多くの失敗の中にも、ふと現場の改善につながったり、理論的な閃きを得たりする機会に恵まれました。考えてみれば、グループ・ダイナミックスは、そもそも現場での出来事に理論的、かつ、実践的に取り組んでいくことから始まったのでした。しかし、私が学んだ当時は、因果関係の究明が重視され、実験室実験を中心(至上)とする流れができていました。阪神・淡路大震災の惨状を目の当たりにした私は、一気に、グループ・ダイナミックスの原点に戻され

ました。ただ、単なる懐古・回帰ではなく、研究について、科学について、歴史について、様々な検討を行って、恩師が中心となって進めておられた新たなグループ・ダイナミックス(社会動学)を構想していく研究に活路を見いだしていきました。現在は、この経験を噛みしめながら、研究室の学生に「思いをもって現場に関われ」と言い続けています。

これまでの成果は、学術論文や学術書はもとより、一般的な読み物として公表したり、メディアでも発言できるときは発言したりしてきました。例えば、エスノグラフィーとしては、阪神・淡路大震災以降の災害ボランティアの動向を批判的に整理したり、中越地震で被災した中山間地の集落で行われてきた活動を紹介したりしてきました。また、イラン・バム地震、台湾集集大地震、四川大地震など各地の災害ボランティアについても紹介してきました。理論的には、協働的实践とアクションリサーチから成るグループ・ダイナミックスという学問分野の位置づけを行った上で、方法論を整えてきました。個別テーマとしては、即興的に営まれる組織の特性や防災活動への参加メカニズムなどを検討し、現在は、死者を含む復興論を構想し、また、過去の被災地の人々が現在(将来)の被災地の人々を支援するプログラムの理論的背景を考察しています。

5. 東日本大震災

東日本大震災と呼ばれるようになった地震・津波・原発事故が発生したとき、私はフルブライト奨学金による在外研究でUCLAに滞在しておりました。地震の一報を聞き、その日のうちに、7月まで予定していた滞在を打ち切り、帰国しました。早速、災害NPO(特)日本災害救援ボランティアネットワークと連絡をとりながら協働的实践が始まりました。大阪大学でも学生有志が集まって被災地へ行こうという動きが生じ、研究室のメンバーもその中心の一人となって参加していきました。災害NPOに届けられる支援金をもとに、岩手県野田村行きのボランティアバスが何度も運行されました。研究室の学生たちも災害NPOのプログラムに参加することから活動を開始しました。数ヶ月経った頃、一人の学部生が、1年間の休学を申し出てきました。野田村に長期滞在し、復興に尽力したいとのことでした。ちょうど、現地では、地元のまちづくりを推進してき

た方のご支援を受けて、災害NPO、大阪大学、関西学院大学、京都大学、弘前大学、八戸工業高等専門学校、八戸工業大学の有志と各地の市民らで結成した緩やかな救援ネットワーク「チーム北リアス」の現地事務所が整備されていました。そこで、本人とじっくりと相談した上で、現地事務所のスタッフとして、野田村へと送り出しました。研究室のメンバーも足繁く野田村に通って現地の方々との協働的实践を展開してきました。現在では、ようやく、津波直後の行動や、野田村の歴史や文化について、聞き取り調査も行えるようになり、記録も徐々に整理されつつあります。

6. おわりに

2012年秋から、大阪大学未来共生イノベーター

博士課程プログラムが始まりました。未来共生イノベーターにとって、東日本大震災の復興現場で学ぶことの意義は極めて大きいため、プログラムの一環として、岩手県野田村に、「大阪大学野田村サテライト」が開設されました。サテライトでは、野田村の他に、宮城県南三陸町、宮城県気仙沼市で展開している研究・実践活動とも連携しながら、大阪大学ならではの活動を展開していく予定です。研究室では、約2年にわたり、研究室のメンバーが野田村で過ごしてきたことをもとに、野田村と周辺地域の本格的な復興に向けて地元の人々と協働的实践を展開し、また、時には、地元の人たちと一緒にアクションリサーチを進めていく拠点として活用していきたいと思っています。

